藤戸

次第
春のミなとの行くすゑや〳〵

下
藤戸乃わたりなるらん　是ハ

佐々木の三郎盛綱にて候扨も
このたひ藤戸乃先陣を仕りたる
依而賞に児島を給はりて候程に今日

ねもころは頬よばつての新任に

次第上
緑ほすの波静なる海迴まて〳〵

松明風も雨もよる数めぐる
紅葉けふも鳥あふ浦ひ
巌大きにやく薫るわく
沙は小ら秋のあふ 浦前には
皆々新発意あらむ老を見出ると
ゆらく りりに忙さつうふ
御みくびく浦の住吉御殿の

清入船にてありしものなるも
新発意ありし若き見出せやらん
老の波越えて藤戸乃明者小若の
亦孫か亀神し 小し きさや那
見成女の新発意となる来なるへ
さしめく 此泣へ何事にてある
姫の御藤に住み乃家かし此

斎をきうなりめ世をはけるゝ
ばりうろ兄む本よわも国果の
めぐ小車舟やかけの人乃渡
貌そばせ某くひうつゝひ那のう
げう子なりうも餘りよどりも
ためしも波の底に沈め給ひし
清濁なるをやずり何巻てひ世風

シテ詞
巻我ともはゞ前よ参わてん毒わ
何と象子を波に沈めし恨とは
更にいはひ　シテ詞　きそなふ象子を
浪の流め給ひし事は　ワキ　あて斎
たし何處く　シテ上ゲ歌　なふあなも
人見まろしとあふ中くよ罪
此様を散しつばななも見ひみは

世よいお残るあり方なも
どひ影くきめそうひたまはゝ
がの悟しりへきよとねさ
とえり志の山道のひなふぬ
世乃人のあはれひなもえつ乃まよ
もふをなまとかくし好ふう母
ほらんはそぬ許世者のおや悦

影るをぐ歎子とて旧やし母し
ざめほ藤しま主林東てあ保まほ
此ひの思ひあさよゝなさ了ぎ流影
恥成て苦ミの海よ流め好ひし
ざせめてえとけをたまへや流
とふりさ好へや　玄波先御
りし数不便なは子きうえりし事

じゝそ河我り行く世へ参らせくは
天晴の有様語てきこ物く庵し
をうよ流て聞ゆく　梅も今度
菊乃先陣を任まし候うるで
案内をなさし故ありまゑ三月
廿五日の夜よいわて浦の男を
一人ちり行きこの海を馬にて

渡りけるなにやあらむと思し母
は老やかに様ちんく川瀬乃様なら
所のく月かしく中は东よあるま
月形未より西小あらでやかハ
幡大菩薩の済告と思ひ家乃す
菩薩よも源く隠し渡男と申
二人衆よ下きそ飛出ひ出は海の

あきと見を見置て悔ましの盛衰
心に思ふやまりやく下着ハ
ほちなるもおゆくみもや人ゐ
浅く世に思ひ不便ゆへなをし
かけとほて了よ務二刀さし一疋
供海に流めて悔し梅老めり
ふよるあるゑれ風く郎よしく

何事も前世のすと思ひ取て免
恨をり経く ミテ 梅なれ数子哉
沈め給ひしば王江ハ麻か何くの
誰よりも 早 あまとふ見てたる
け義理の君乃びらきし郎さし乃
水乃ふゆ見えりづ殺をふゆなき
かくしてなわ ミテト きせそひと流

やしもかも いつまできるわくらわ
あの遠方の波の よるべの子
ゆく者 かと無人も知らし
思ひしに 如何隠はなき語なを
涙くらく 過きし思へとも 好事
門を出す 悪事千里をゆくなる
事をはまぬ 我やから人

ずりなり 形気こそも
月乃影 ききつや人乃歌の
心は闇にあらねども 子を思ふ
道に迷ぬとは 今こそ思ひ知らる
と於ぼ 本よりも なきよ理を
まはあらわぎか 不定のさかひ
なれは老きを先立て 遠ざなく

一、、、、二二一一一、、
のゝ所老鶴乃眠のうちなれや
一一、、、二一、、二八一
遊あとら思ふ親と子ならずこち
二下、一一八二二下二二一
雛乃としなかへ梢初よ立離し
一、、二二、、二二一
なもまだ書よ思ひしふみいはの
一、、二、、一一上
世よ逢へ義 世よゆめはう義
一一一一二二二月上二二一二二一
ふしきなる河竹の杖柱なさ
一一一一、、一一一一一
はまれのまゝ乃ゝよ我まぬまは

上九一二、、二二、二下二二一、、
だき得るよ衣の露を払ひまし
一八一一一、、下一一
おうしひもあるはきう心して
、一一八一一下二一、二八一
もらう義方なは扨だゝぬ子と
二二下二二一一、八九一下二一、
月しそよ月してたりしき竹へ吃
二九一、一一一一下一一一
くめもさしひふしまわろひ家子
一一一下二一、一一八九一下、
の通させ竹へやとげ浮てな義
一二二、一一一二、一、
角撥なせかへ所きう蔦なわ老ふ我

半詞
あゝ不便やなゝハ恨つゝまひ
なよすそへみそば老乃波をも
思ひみ妻子をも世に立ける
ゆくさき家居に悩みくめるに
旅の衣能は老不便にて旅に
さまくの思ひをなしみだれ
母をも世に立てうゆるにきこう

上哥
きぬく〳〵に
思ひし中付えく
思ふ涙のあふれそゞかなよ
うらみ乃その悦なく思ひはらも
けふぬとつひの親子乃身の
さりはりし思ひもいかな我とても
法乃ずゞをせ志ほめ称和南無字
下
一切の情殺善悪三界不浄忠顔

後三下上 〽ましや思出しまゝ世と思ふ

心こそ忘ぬよわひなれ

さらまくもあさき浪の定め

風くたび舞よりへ乃水にさう

ばゝらん乃流れ尻らたおもき

飛舞もえへきふ由なりまりほ

海語の志る通おりん大三昧

早上古ル 〽めしきや形はや

涼み凡なわ

ありほぎの水辺よりわざーとほ

もおこ凡しるゑば亡老もや

み遊らん覚奇呉乃思ひを則し

宮称は 三韻 〽清界ひきき新巻寝ず

ばら八流きぬ家机をやさん為ふ

東里たわ 口羊上 〽あまりこ帰を夕月ふ

ず給ふかへ浦波の　藤戸此
わづかなる迄らとのおりさも
おもひ先陣の川瀬乃やまなる
浅ミ乃通リを残　哉ーましに
まだ見しけれは　弓箭の浮名を
あくものかたり　若より此方に
此ささ給ひて馬にて海を渡す事

前代のためしなきとて
此海を通りたまはりけるほと深
浦よりひもやまき按へなれば
此の所の通りなれど　さへきさる
思乃外に一家をなめきみの手柄
馬にて海を渡すわもご称ふ
前代乃ためしかあるぞうまでも

忘まりさやあまなはう哀しの
岩の上よ急なほまてり丸乃
がみちとなる手はの刀を抜て脇差
あらわなさしとなしさしと我
きはまはきも魂もぎえくと
形ちとかを天使うんよなし
めゝ形でて手みの座よ沉れしふ

秋わかめ刃艫よくびれて
り波のうきぬ志ほこぬ理未ず
岩乃がなきはになりけりしけて
みちとの水底の悪龍乃がみ神で
なほて服をなきさと思ひしよ
がおもはさるよ清吊ひの法乃
みかなにひ乃まをえそびけ影りちら

弘誓乃舟よすゝの底みなれ棹
ざしの歩て行旅よ生死の海を
渡りて彼のまゝにふやうく覚
ばきよばつくくてうれしき舟
ゆらわくて成仏解脱の身と
なるとぬ成仏の身とうまる嬉